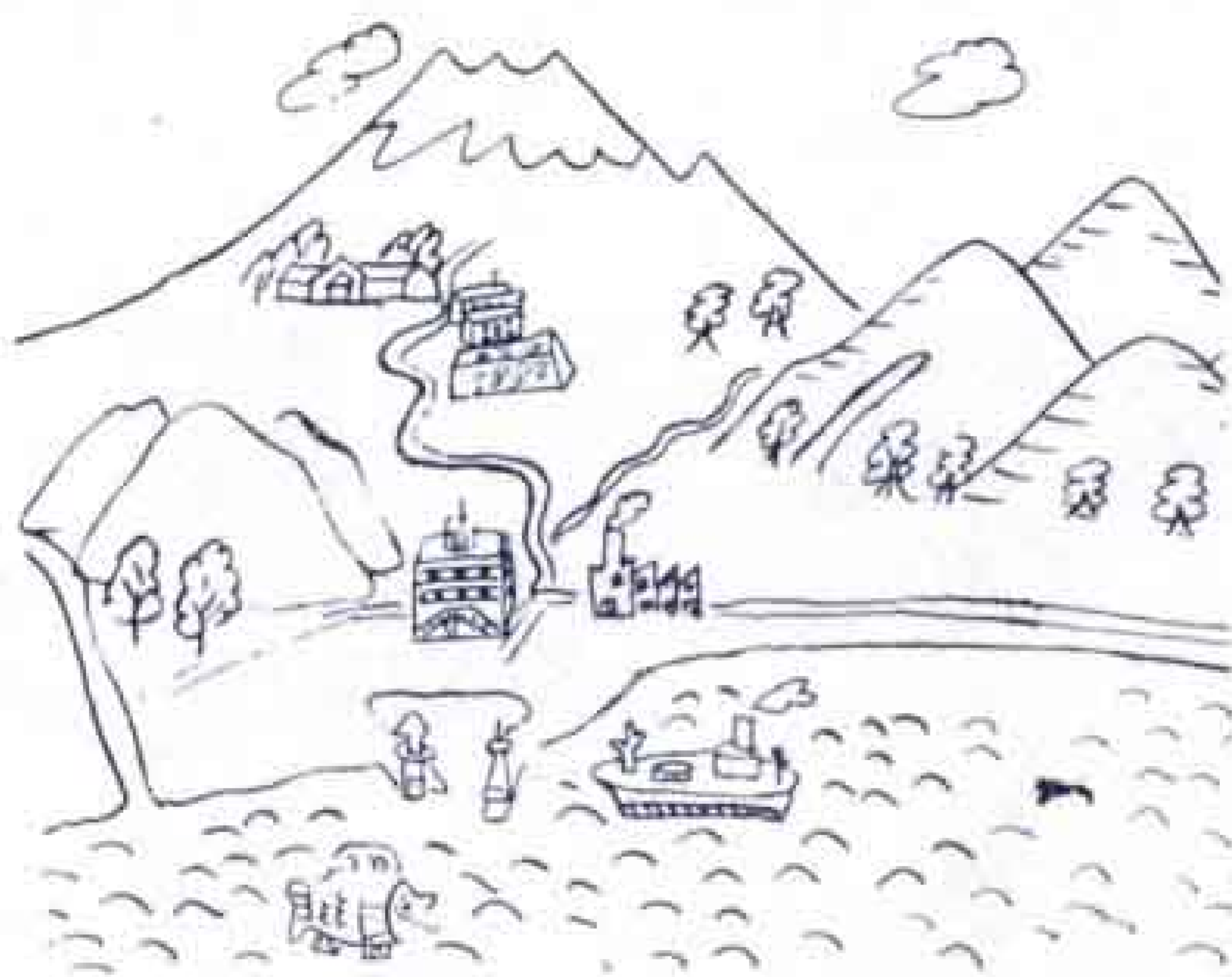




気象 (No.1)

富士市は、三方を山々に囲まれ一方が海、という地形をしていますので、天気や気温をはじめ、気象に他の地域と異なる現象が見られます。

「夏すずしく冬あたたかい、海洋性の気候であることがあげられます。また、この地域の年平均気温は15℃くらいで、最も暑い8月でも平均26℃、寒い2月でも6℃と、住みやすい土地といえます。しかし、勢子辻のような標高の高い所では最低気温が氷点下5℃以下になることが何日もあり、同じ富士市内でも大きな差があります。



■ 気 候

富士市の地域では、平野部の気温は、年間を通じて県内でも高いほうです。しかし富士市は、標高3,000m以上の高い所から、海拔0m地帯までなだらかに続く、日本でもめずらしい地形をしていますので、気温もその影響でたいへんに差があります。気温は普通、標高が100m高くなるごとに、0.6℃ぐらいさがるといわれています。

臨海地域では、昼は海から陸へ向かって海風が吹き夜は陸から海へ向かって陸風が吹きます。海風、陸風の変わる時を朝なぎ、夕なぎと呼び、特に夏の夕なぎのときはむし暑く感じられます。しかし、西風の吹く季節風の強い時期には海陸風はみられません。

この地域の気候をがい観して見ますと……。

春から夏へ

春になり、夏になるにつれ、曇りや雨の日がふえ、6月の梅雨期では、ひと月の半分ぐらいが曇りで、降雨の日数もひと月の半分ぐらいとなります。

このころ、駿河湾からしめり気を含んだ南風が多く吹くようになります。この影響で間門、今宮、穴原あたりから北の方では、霧がよく発生します。少年自然の家や勢子辻のように、標高が600mから700m付近で

は、霧のため視界が数mになることもしばしばあります。

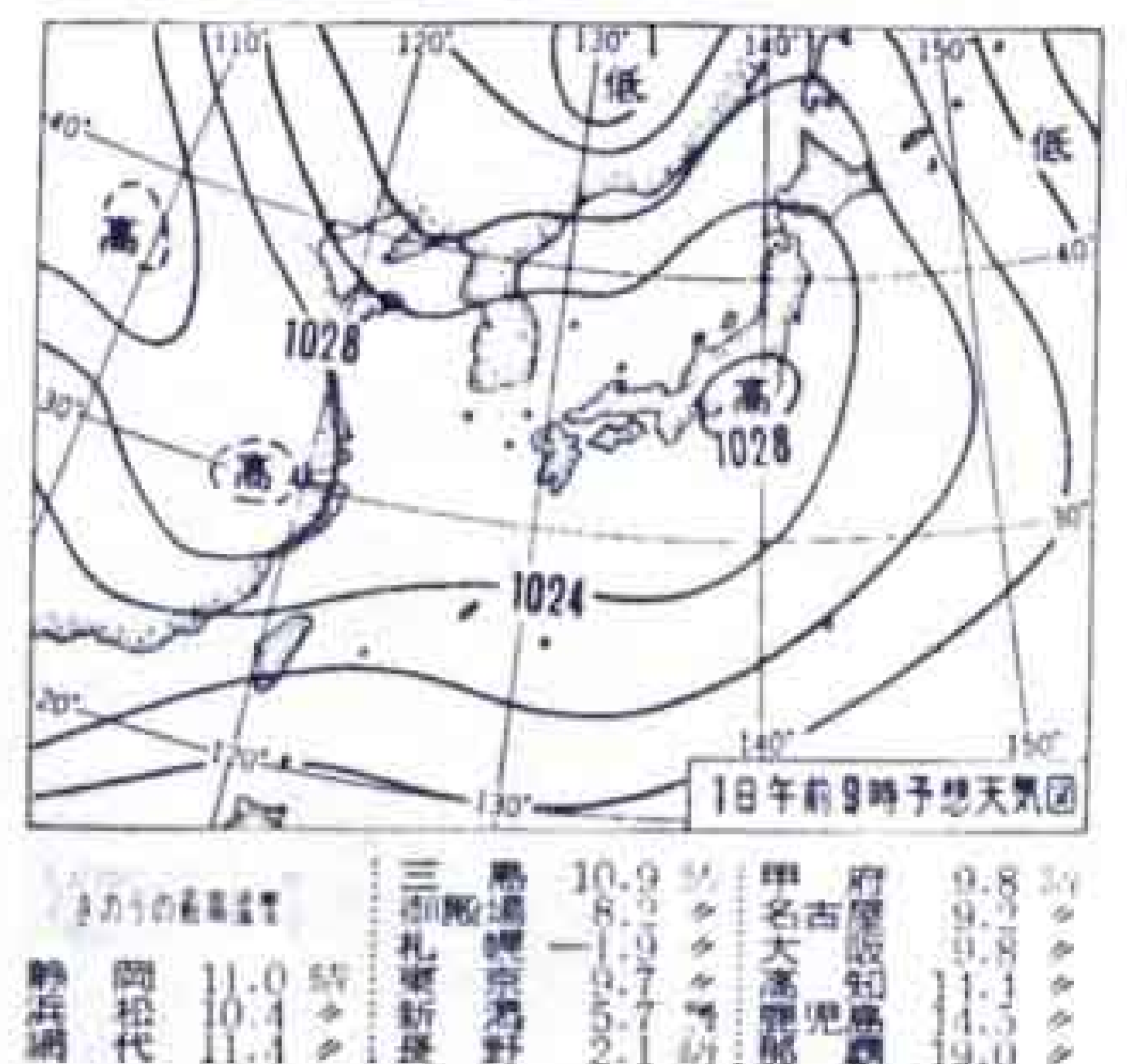
夏から秋へ

8月から晴れの日がふえ、入道雲がよく発生し、ときには雷雨注意報が出されます。夏から秋といえば台風シーズンですが、昭和49年7月7日の七夕豪雨のような大雨が一部の地域で集中して降ることもある反面晴れ間も多くなり、なかなか姿を見せなかった富士山も、雲間に見えるようになります。

秋から冬へ

台風シーズンと秋の長雨もあがり、10月に入るとよく晴れた日が続きます。下旬になると北西の方向からかわいた冷たい風が吹き始め、気温は急にさがり山間部では霜が降ったりします。須津川溪谷や丸火自然公園の紅葉もいっそうあざやかさをまし、富士山もそろそろ雪のベールにつつまれるようになります。

予想天気図



冬から春へ

12月から1月にかけては、冷たい西風や「富士おろし」と呼ばれる風が北の方から吹き、カラカラの天気が続きます。2月にはいと曇りの日も多くなり、ときどき雨も降るようになります。このころ南から強い風が吹くこともあり、丘陵地などの畑の多い地域では土ぼこりがまきあげられ、川の色が茶色に変わることもさへあります。そしてこの南風が吹きあれたあと、一雨ごとに春が訪れてきます。

気象の符号

- …… 快晴
- ◐ …… 晴
- ☉ …… 曇
- …… 雨
- ⊗ …… 雪
- ☉ …… 煙霧
- ⊙ …… 霧
- ⊖ …… 雷雨
- F …… 風向
風力

不快指数とは？

不快指数という言葉が日本で最初に使われたのは昭和34年です。ある新聞に、次のような記事ののりしました「ニューヨーク気象台では、天気予報に不快指数の一項目を加えて発表することになった。この不快指数とは温度と湿度の影響によって人体が感ずる不快感を数字であらわしたものの…」その後日本でも、ニュースなどで「本日の不快指数は…」などといわれるようになりました。

不快指数の計算

$$\text{不快指数} = 0.72 \times (A + B) + 40.6$$

〔計算例〕

$$0.72 \times (32 + 26) + 40.6 = 82.4$$

不快指数	不快を感じる人
70	一部の人
75	半分の人
80	大部分の人
85	重労働はできない

(次回は「雨」と「台風」を掲載します。)